

架蔵箏組歌本『琴のくみ』の位置づけ  
— 附翻刻・影印 —

飯島 一彦

獨協大学国際教養学部

マテシス・ウニヴェルサリス 第九卷 第二号

二〇〇八年三月三十一日 発行

## 架蔵箏組歌本『琴のくみ』の位置づけ — 附翻刻・影印 —

飯島 一彦

### 一 はじめに

今回一部影印および全文の翻刻を添えて紹介するのは、元禄十五年（一七〇二）に書写された、架蔵の『琴のくみ』と題された写本（箏組歌本）である。これは江戸時代前期に完成されたとされる箏組歌（いわゆる八橋十三組）のテキストを主に観賞用に書写したと考えられるもので、この時期の箏組歌本が基本的には独習用の譜本として板行されたとおぼしきものがほとんどであるのに対して、個人的な使用目的に沿って、美しい歌謡テキストとして製作されたと思われる点、さらに装丁が折帖仕立てとなっている点が珍しいものである。さらに歌謡史上から見るときに、本書の存在は、内容と歌詞の異同という点からは、一般には八橋検校が作り上げたと言われる箏組歌の成立史・享受史の考察に幾らかでも寄与することになると思われる。ちなみに、歌謡テキストが書写されて残る理由は幾つか考えられるが、おおよそは伝授（伝承）の証、演奏のための心覚え、教習の為の手引きである。特に箏組歌本に関して言えば、板行されるものはほぼ全て独習用の譜本（もしくは教材）である。その他の写本は伝授の証であることが多い。もっとも17世紀から18世紀初頭にかけて、あまりたくさんの本が残っているわけではない。



になろう。

右の平野の指摘をもとに、現時点で考えられる限り、八橋十三組の詞章のほぼ全貌を示した最初の書物としては、まず元禄八年（1695）刊の『琴曲鈔』（京寺町第五橋梅村弥右衛門、同寺町四条下ル町尾崎七左衛門、江戸日本橋萬町松柴清四郎連版）を挙げなければならない。平野の衣鉢を継ぐ谷垣内和子による『日本古典音楽文献解題』（講談社、昭和六二年）の記述では「その後の箏組歌書の規範となった」と評価されており、本文は奥伝三曲（「四季」「扇」「雲井」）を除く各曲について略譜を傍注し、注釈を記す詳細な箏組歌本である。それ以前の箏組歌本には『鳳鳴秘曲抄』（写本、元禄以前、目録首部に「八橋流」を明記する、平野健次旧蔵）『琴のしやうか』（天和元年版本、現存最古の箏組歌版本、住山流、東京芸術大学蔵）等があるが、いずれも組歌各曲を残さず記したのではない。なお、『琴曲鈔』板行と同年には「元禄八乙未十一月日 京寺町五条はし詰め 梅村弥へもん板」の刊記を持つ袖珍本『峯の松風』も刊行されている。『琴曲鈔』と同じ版元からの出版と考えられ、注釈は無いが『琴曲鈔』よりさらに簡略な略譜の傍書が奥三組を除く十組に付されており、いわば『琴曲鈔』の簡易版として通用したものであろう。この書物については平野は右の諸論で触れておらず、『日本古典音楽文献解題』でも後述の『琴のくみ』の項に谷垣内和子が「同種の豆本」として指摘するのみである。『峯の松風』については今後の研究に俟つところが大きい。

ところで実は、『琴曲鈔』以前の記譜のある組歌本として平野も挙げている、天和二年（1682）「小刀屋六兵衛」の刊記を持つ『琴のくみ』と題する袖珍本（豆本）が存在する。平野によれば「題名不詳豆本」とされるこの本は、やはり谷垣内和子による『日本古典音楽文献解題』の記述では「八橋検校作曲の組歌一三曲の詞章を収録。特に「ふきくみ」第四歌までには歌詞の右側に演奏法の注記が施されており、この種の記譜を有するものとしては最古の組歌本である。」と評価されるが、残念ながら天和版と確定できる伝本は存在していない。筆者の管見の限りでは天和元版を利用しての可能性を指摘できる文政二年（1819）河南喜兵衛版（上野学園日本音楽史研究所蔵）およ

び文政四年（1821）香具屋徳兵衛版（平野健次旧蔵）、他の零本があるのみである。文政二年版、四年版両者とも天和二年の刊記部分までは同版を用いている。ただし、上野学園日本音楽史研究所には、ほぼ同型同内容（図柄もふくめて）でありながら、明らかに別板の無名本がある。これは「元禄八年乙亥初度版」の刊記を持ち、刷りも若い。天和二年版が実際に存在したかどうかはまだ確定できないだろう。

『琴のくみ』の名前は延宝三年（1675）刊『新增書籍目録』に既に見えており、その後も貞享二年版『広益書籍目録』元禄九年版（1696）『書籍目録大全』元禄十二年版『新版増補書籍目録』などに見えるから、盛んに出版されたものであるらしい。むしろこれらの同名の書籍の内容がすべて同じものだという保証はない。しかし、もしこれらの『琴のくみ』が天和二年版の同名書を指しており、しかも天和二年版が文政版と同内容で存在したとすれば、『琴曲鈔』以前に八橋十三組の詞章の全貌が、しかも八橋検校在世中かなり早い時期に出版されていたこととなり、箏組歌がどのように完成していったかを考えるに当たって、その価値は高いといわざるを得ないだろう。

#### 四 架蔵本『琴のくみ』について

さて、右に示したような版本の『琴のくみ』が天和二年あるいはそれ以前に刊行されているとするならば、架蔵本『琴のくみ』については、当然それとの関わりを考えなければならなくなる。むしろ版本と写本の違いがあり、作製にはおのずから意図の違いが根底に存在するのは間違いない。

文政版の『琴のくみ』と架蔵本の内容を比較すると以下のような点を指摘できる。

① 収載曲目に関してはまったく一致する。『琴曲鈔』に収載される「四季の曲の序」は両者載せない。

② 版本では最初の組である「ふきくみ」の第四歌までは歌詞の右側に簡単な演奏法の注記が施されている。この点はずでに『日本古典音楽文献解題』で谷垣内和子が指摘している。写本である架蔵本には一切の演奏注記がない。

③両本とも曲目(組名・歌数)は一致するのにもかかわらず、表記(漢字・仮名遣い)は一致しない。版本の方が平仮名が多く、より発声(つまり実際の演奏)を意識している可能性がある。これは濁点の表記にも現れており、版本には濁点表記が見られるが写本には一切ない。写本の方は歌うための本(譜本)というよりは、古写本の体裁に則って作製した、鑑賞する書物の性格を示すものかもしれないが、伝承を記す際にわざとそうした可能性も考えられ、断定はできない。

④歌詞の一部に差異が認められる。たとえば「梅かえくみ」第四曲の末尾が版本では「なみた川」であるのに架蔵写本では「涙かな」(写真Ⅵ参照)、「天下たいへいくみ」第六曲の末尾が版本では「いろのますそあやしけれ」で語法的にも誤りであるが架蔵写本では「色のますそあやしき」(写真Ⅶ参照)となっている等である。これは『琴曲鈔』と比較すると前者は「なみたかや」となり後者は架蔵写本と同一である。ちなみに『峯の松風』では前者後者ともに版本『琴のくみ』と同一で語法の誤りも一緒である。部分的ではあるがこのような差異は重要であろう。基本的には口頭で行われていたと思われる箏組歌の伝授・伝承の際に当然生じたであろう誤伝もしくは意図的な差異化(流派の違いの明示ともなりうる)の反映がここに見られるはずだからである。このような差異についてはもう少し詳しく分析を進めなければならないだろう。

⑤末尾の文がほぼ一致する。版本では「右十三くみのうちにも 四きの曲<sup>きよく</sup> あふきの曲 雲井の曲是を三曲とて大事のならひ也たやすからぬ事と也」とある(曲名に掛かる合点は省く)。架蔵写本では「右十三くみの内にも四季の曲 あふきの曲 雲あきの曲 是を三曲とて大事の習 なりたやすからぬ事と也」となっていて、表記以外は同一の文章である。この、いわゆる奥伝(奥許)三曲についての注記は、たとえば『琴曲鈔』では「四季組」の「序」の曲の後に「四季 扇 雲井 此三曲はことさら大事にて傳受する事也」と記され、『峰の松風』では冒頭の目録において「四きのきよくくみ 此曲より以下あふきの曲雲あきの曲は三曲とて大事のならひ也」とあるのみで末尾には

記されない。『琴曲鈔』以前の『鳳鳴秘曲抄』『琴のしやうか』には同様の文章は見ることができない。この文章は、『琴のくみ』に独自のものとすることができよう。

右のような比較から見限り架蔵写本は版本の『琴のくみ』との深い関係を認めることはできるだろう。もし天和二年版が明らかに存在したと考えられ、さらにその内容が延宝三年版書籍目録にあるものと同内容とするならば、八橋十三組は早い時期に完成しており、架蔵写本はそれらを踏まえた上で、筆者の南呂なる人物が個人的に箏組歌の歌詞を鑑賞する目的で美麗に作製した本ということになる。しかしまた天和二年版が確認できず、元禄以前の書籍目録にある『琴のくみ』の内容が文政版とは違う可能性もあることを重視するならば、架蔵写本の『琴のくみ』は『琴曲鈔』以後の八橋十三組とは別の歌詞伝承を記す重要な文献ということになる。いずれにせよ、問題は八橋十三組の形成、すなわち箏組歌の十七世紀における生成発展の問題と深く関わっており、軽々に断定はできない。

## 五 翻刻『琴のくみ』

以下に架蔵写本『琴のくみ』の翻刻を示す。組名に付された朱書の△と各歌冒頭の合点はそれぞれ△で示す。折帖仕立てであるので山折・谷折(各頁末)を行末の△で示す。変体仮名は通行の平仮名にした。濁点は付されていない。漢字表記はそのまま(必要のあるものについては旧字体)で示した。

琴のくみ (表紙) 『

△ふきくみ

「ふきといふも草の名めうかといふも  
草の名ふきしさいとくありて  
めうかあらせたまへや

「はるの花のきんきよくくはふう  
らくにりうくはえん柳花苑の  
鶯はおなしきよくをさへつる

「月のまへのしらへは夜さむをす  
くるあきかせ雲るのかりかねは  
ことちにおつることゑく

「長せいてんのうちにはしゆんしう  
をとめりふらうもんの前には  
月のかけおそし

「はなちる里のつれくたえく  
のことのねはなたちはなの袖の  
かに山ほと、きすおとつる、

「思ひねの夢のま枕にちきる  
あけかたさめてはもとのつらさ  
にて涙の外はあらしな

「さよふけてなくちとりなにを  
おもひあかしねうき世を須磨の浦  
みにて我れとひとしき涙かな

「しらま弓のまゆみのそるへきは  
そらいて八十のおきな恋に  
こしをそらいた

「みほの松風ふきたえておきつ浪  
もあらしな水にうつろふ月と  
もに詠につくふしさん

「こうきてんのほそどのにた、す  
むはたれくおほろ月よの内侍  
のかみ光る源氏の大しやう

「たそや此夜半にさいたるかをと  
た、くはた、くともよもあけし  
よひのやくそくなければ

「七せきのへいふうもおとらは  
なとかこへさらんられうの袂も  
ひかはなとかきれさらん

「梅かえたにこそうくひすは巢  
をくへかせふかはいかにせん花  
にやとるうくひす

△心つくしくみ  
「こゝろつくしの秋かせにすまの  
うらはの浪まくら衣かたしき  
ひとりねて夢もむすはぬよなく

「ふる里をはるくとへたて、  
爰にすみた川都鳥に事とはん  
君はありやなしやと

「なつの夜の明ほのに夢をさます  
ほと、きすしろたへに見ゆるは  
月にさらす卯の花

「きりにた、すむおくるまやつ  
してたてる小車の人めしのふの  
ちきりこそ更てねやのかよひち

「飛鳥川のみなかみをすゝりの

水にせきいれてかく言の葉は  
つきましやけふも暮さん命かや

「ちきりしよひのたそかれにし  
るへふかきそらたきとめ入かたの  
萩の戸をひらくや袖のうつり香

△天下泰平くみ

「天下太平長久におさまる御  
代の松風ひな鶴はちとせふる  
谷のなかれにかめあそふ

「人しれぬちきりは浅からぬもの  
おもひつゝむとすれと紫の色に  
いつるそはかなき

「はかなくもくまなき月をいかて  
うらみしとにかくにわか袖に

たえぬ涙のゆふくれ

「はなのえんのゆふくれおほろ月  
よにひく袖さたかならぬちきり  
こそ心浅く見えけれ

「すみよしのみやところかきならす  
ことのね神のめくみにあひそめて  
すきしむかしをかたらん

「秋の山のにしきはたつたひめや  
おりけんしくれふるたひことに  
色のますそあやしき

△うす雪くみ

「うらめしやわかえんうす雪の  
ちきりかきえにし人のかたみとて  
なみたはかりやのこるらん

かせの四方にちらすはなのか

△雪のあしたくみ

「雪のあしたの嵐は木すゑの花の  
ちるふせいなこりおしきはとに  
かくに待えし君のかへるさ

「浅ましやわか身は雲井のかりの  
ゆふきりにおとしめらるゝ思ひ  
をはいつのよにかはわすれん

「まとろめはおもかけをしけくと  
みしか夜に郭公おとつれて  
はつ音に夢そさめける

「なかむれはいとゝたにこひしき  
人の恋しきにくもらはくもれ  
秋のよの月に恨はあらしな

「しのゝめのまかきにつゆをふくむ  
朝かほ玉のかつらたをやかにかゝ  
るや花のおもかけ

「世々の人のなかめし月を誠の  
かたみそとおもへはく涙  
玉をつらぬく

「よし野川の花いかたさほさすひ  
まもあらしな岩浪たかき山

「みねのあらしのかよふか谷の水の  
なかれかねさめにきけは松風は  
ことのねにたかはし」

あふひの上のときめき加茂のもの  
見のおりから車あらそひつ  
れなきはふかきうらみ成へし

△雲のうへくみ

「雲の上のなかめはありしむかしに  
かはらねと見し玉たれのうち  
そた、なつかしやゆかしや

「おもしろやさみたれ花たちはな  
のにほへりほと、きすおとつれて  
みしか夜なれとねられぬ

「中くにはしめよりなれすは  
物をおもはしわすれは草のな

にあれとしのふは人のおもかけ

「おもひあまりせきかねてうらみ  
ぬるよの涙はとこすさましやひ  
とりた、枕に恋そしらる、

「むさし野にゆきくれて月をなか  
めて草まくら恋しき人を夢  
に見てうた、ねの袖しほる、

「のきをめくるてんてき琴の音に  
たくへて七年の夜るの雨かつ  
てかしらぬ夢のよ

△うすころもくみ

「かすならぬ身にはた、おもひも  
なくてあれかし人なみくくの  
うす衣袖の涙そかなしき

「あこかれて思ひねの枕にかはす  
おもかけそれかとてかたらんと  
おもへは夢はさめけり

「しら雪のみゆきのつもる年は  
ふるともあくましやもろともに  
ねみたれかみのかほはせ

「ひく人はそれくあまたありとも  
つまことにもとの心かはらすは  
ことちにおちよ秋かせ

「かしは木のゑもんの鞆をとんと  
けたれはまりはえたにと、ま  
りて梅ははらりほろりと

「さりとはつれなやひかふる君か  
たもとのあやにくになひかぬは  
てかひのとらのひきつな

△きりつほくみ

「きりつほのかうるのひよくれん  
りのちきりもさためなきよの  
ならひとて夢の間そかなしき

「みしか夜の夢さめて面かけ  
を夏むしの身よりあまる  
おもひをはいかて人にかたらん

「秋の夜はふけゆき月はしに  
かたふくまつかせやなみのおと  
しかのこゑそさひしき

「みちしるへせし小君の中たち  
にひかれて行ゑまよふか空蟬  
のきぬのかほりそゆかしき

「たそやこよひさよふけて柴の



戸ほそをたゝくは尾上おろしのおとつれか秧鶏のつくる聲く

「あをやきをかた糸によりてなけやうくひす鶯のぬふてふかさも梅かえたの花かさ

△須磨くみ

「すまといふも浦の名あかしといふもうらの名さらしなの月友になかめていさやかへらん

「はるによせし心のいつしか秋にうつろふくろきあかきませのうちによしある花の色く

「きりくす夜すから何を思ひすたくそわれもおもひにたへかねていと、心のみたるゝに

「中く人にをはうらむましやうらみしとにかくにかすならぬうき身のほとそかなしき

後「しんかうに月ふけて車の聲のきこゆるは五条わたりのあはら屋の夕かほをしるへに

前「三五夜中のしん月くまなきそおもしろや千さとのほかの人までもさそや詠あかさ

△四きのきよく

「はるはむめに鶯つ、しや藤に山ふきさくらかさす宮人は花にこゝろをうつせり

「夏は卯の花たちはなあやめ

はちすなてしこ風ふけはず、しくて水に心をうつせり

「秋はもみちしかのねちくさの花にまつむしかりなきて夕暮の月に心をうつせり

「冬はまつはつしもあられみそれこからしさへしよのあかつき雪にこゝろをうつせり

△あふきのきよく

「あふきはさくらのみゑかさね霞る月をゑにかきて水にうつせる心はへもいとなつかしき有さま

「たぞかれ時のまきれにほのく見へてさけるは小家かちなる軒のつまにあまりてかゝるゆふかほ

「夢にはかり夜なくおもふ人を見ちのくのなこそせきをたれかすえてうつゝ、にこともかよはず

「こひくて恋してこひしき人を見ん行ていさやはやみん

「あかしかねたる霜よのどこもさむけき風のおとそよくさらくとふるやたまさ

△雲井のきよく  
「人めしのふの中なれは思ひを

「むさし野もさらしなもすまやあかしのおもかけをうつして爰に住む月の流れはいつも廣沢

「夢にはかり夜なくおもふ人を見ちのくのなこそせきをたれかすえてうつゝ、にこともかよはず

「こひくて恋してこひしき人を見ん行ていさやはやみん

「あかしかねたる霜よのどこもさむけき風のおとそよくさらくとふるやたまさ

△雲井のきよく  
「人めしのふの中なれは思ひを

むねにみちのくのちかの塩かま  
名のみにてへたて、身をもこかる、

「わする、やわすらる、わか身の上

のおもはれてあた名たつうき  
人のすゑの世いか、あるへき

「身はうきふねのかちをたへよ  
るへも更にあらいその岩うつ  
浪の聲につれてち、に

くたくる

こゝろかな

「たまさかにあふとても猶ぬれ

まさる袂かなあすのわかれを  
かねてより思ふ心の先たちて

右十三くみの内にも

四季の曲 あふきの曲 雲ゐの曲

是を三曲とて大事の習

なりたやすからぬ事と也

「雨のうちのつれ／＼昔を思ふ

おりからに哀をとめて草の  
戸をたたくや松のさよ風

元禄十五年壬南呂書之

（朱印…蘊・卍・歳）

付記 本稿を成すに当たって上野学園日本音楽史研究所蔵本の閲覧を快く許可していただいた同所長福島和夫先

生に深く感謝申し上げます。

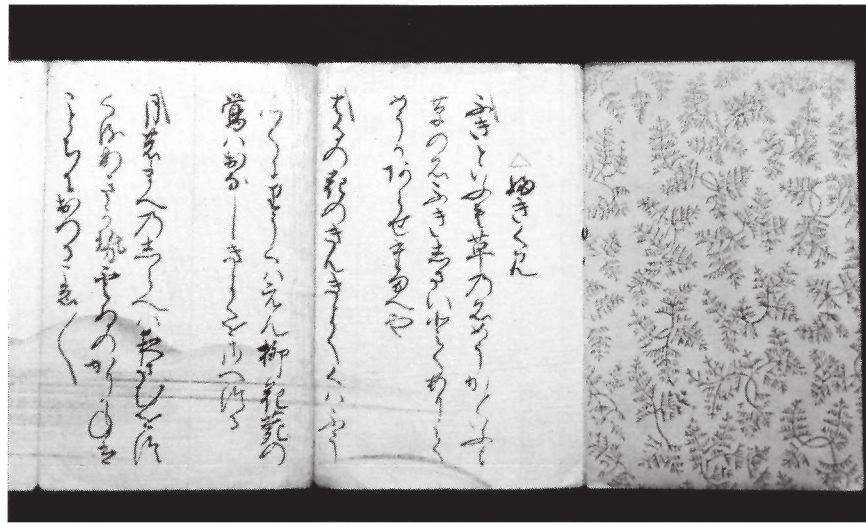
思えば筆者が獨協大学に赴任するに当たって元獨協大学教養部教授故平野健次先生にはひとかたならぬ恩義を被った。旧教養部はずいぶん前に解体されたが、今また新たに国際教養学部として新しい出発をした年度に、こうして近世邦楽史・歌謡史の泰斗であった平野先生の業績を基に架蔵本についての論文を記すことができることに、浅からぬ因縁を感じざるを得ない



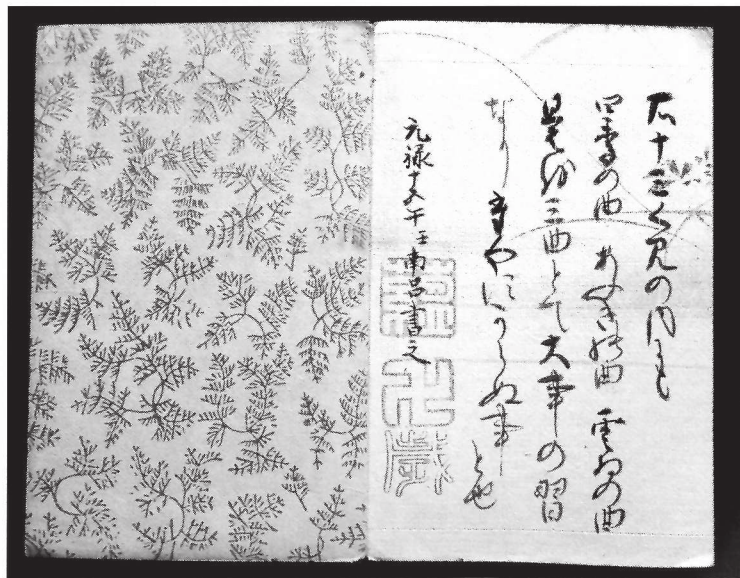
写真I 「表紙」



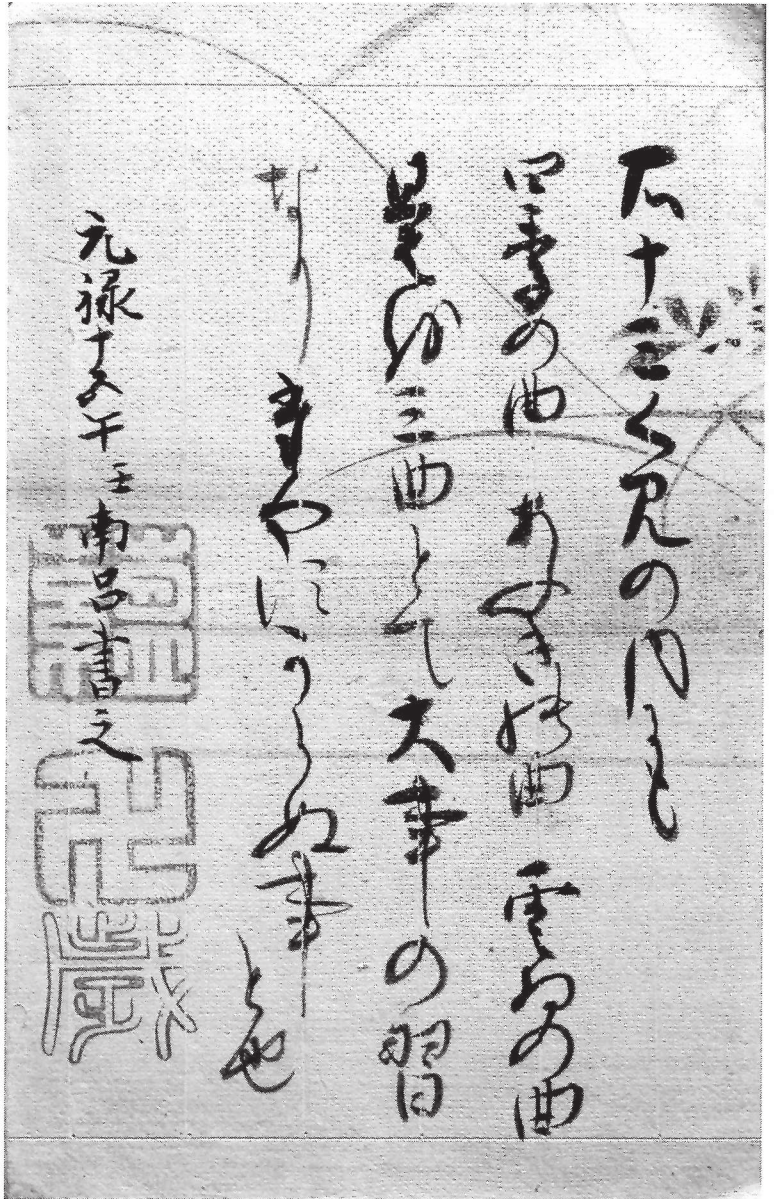
写真II 「裏表紙」



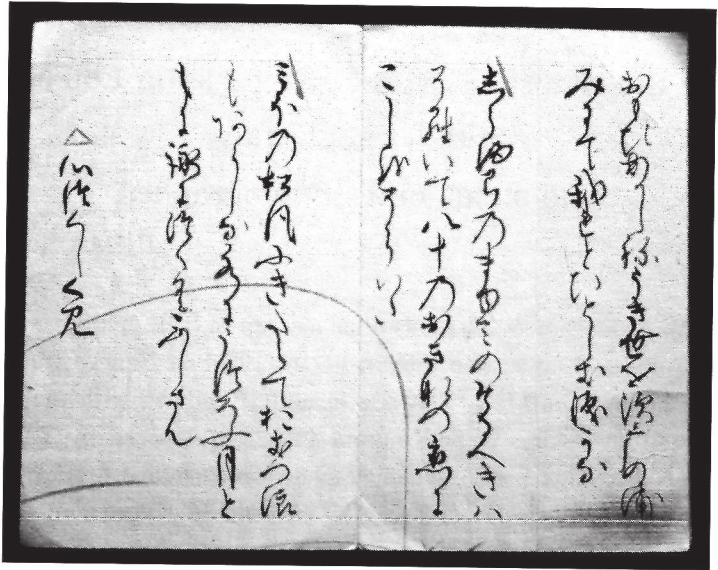
写真III 「表紙見返しおよび本文冒頭」



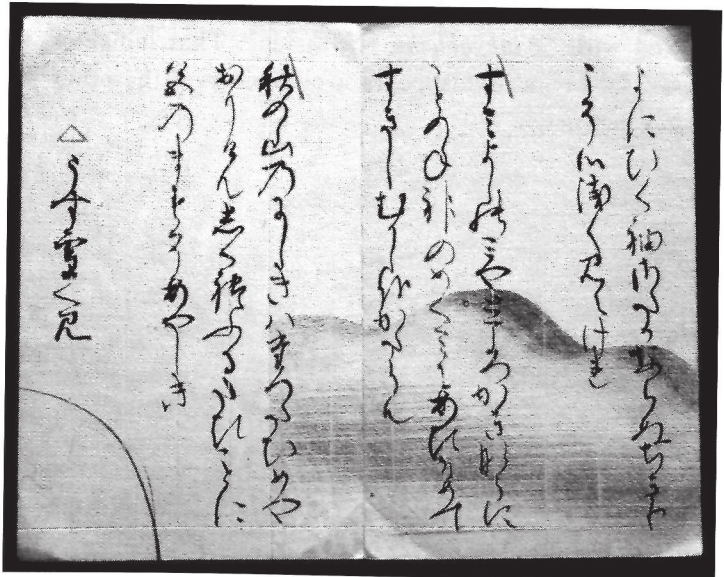
写真IV 「本文末尾および裏表紙見返し」



写真V「本文末尾奥書」



写真VI「梅かえくみ」第四~六曲



写真VII「天下泰平くみ」第四~六曲

The position of “*Koto No Kumi* (『琴のくみ』)”  
on the history of SO-KYOKU (箏曲) in Edo era,  
with its reprinting,  
and a part of its Photographes.

IJIMA Kazuhiko

“*Koto No Kumi* (『琴のくみ』)” is a manuscript of So-Kumiuta (箏組歌) had came into my own possession that was transcribed by Nanryo (南呂) whom unknown in 1702 (元禄15年). It is a beautiful textbook with the object of appreciation of a suites of So-Kumiuta (箏組歌) composed by Yatsunashi-Kengyo (八橋検校1614 ~ 1685) who had made it complete at first.

There is “*Kinkyokusho* (『琴曲鈔』)” printed in Kyoto and Edo 1695 (元禄8年), was said ordinarily that it is oldest and complete transcript of Yatsunashi-Kengyo's So-Kumiuta.

But, the text of “*Koto No Kumi* (『琴のくみ』)” has not a few difference as compared with “*Kinkyokusho* (『琴曲鈔』)”. That indicates “*Koto No Kumi* (『琴のくみ』)”'s text appears a possibility of the other stream of Yatsunashi's instruction.